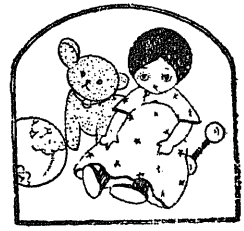

初めて童魂に觸れて

高松市玉藻幼稚園　平尾ヨシカ

明日からいよ〳〵先生になるのだ。しかし自分は實際幼兒といふものに理解があるかしら。趣味があるかしら、いや〳〵それよりか自分が本當に幼兒に取りて幸福な先生かしら、あゝもう一度よく考へてから承諾すればよかつた、なんて自分は愚者なんだらう。子供が可愛そうだ、私の樣な汚れた者が、純な幼兒を汚しはしないのかしら。これも運命とあきらめ樣、神樣が私の汚れた身を、潔めといふ運命かもしれない。そうだ私はあらゆる全身の努力を以つて、務めねばならない。私の胸は強く高く弱く悲しく躍つた。

× × ×

翌朝でした、時間より一時間程早く、幼稚園に登園した。私の胸は恐しさに、おののきました、もしか幼兒が來てはゐないかと不安な心持を抱いて幼稚園に行つた、室内は靜かであつた、オルガンが淋しく見えた。五分間程して四五人の幼兒が、僕が一番だよと走りながらやつて來た。私はもうスタートを切つたと感じた、私は幼兒の來るのを恐れながらも、うれしかつた、幼兒は私の顏を見てなんだがブツ〳〵さゝやきながら不思議そうに見ていたが、ニツコリして、先生お早よう先生お

早ようと、口口に言つた、私はあまりに幼兒の優しい、そして懷しみのある聲で呼ばはれたのですくはれた樣な感がした、餘りのうれしさに何んだか目に涙が宿つた樣な感がした。私もニツコリして、「お早ようございます」。二三十人の幼兒はそれ〴〵に朝の挨拶に來る、私も丁寧に挨拶した、まう幼兒つて、こんなものかしら、今ちよつと會つた丈で、お父さんや、お母さんの樣に、又私は生れて始めてこれ程愉快に又恐ろしい事はなかつた私はぢつと幼兒がいかにして遊ぶかしらと童魂の世界に對して、油斷はしなかつた、しかし、きくもの、見るもの、なすもの、話すもの、まるで珍らしい事ばかりであつた。

集會となつた、幼兒は聲を張り上げて歌を歌つた、先生が、さあ皆さん、先生が昨日云つたでしよう。みんな野口先生がお出にならなくなつて淋しかつたでしよう。今日から平尾先生がお出になりました、平尾先生も野口先生の樣にお優さしいほんとうにいゝ先生ですの、みなさんはうれしいでしよう、だから、野口先生のときの樣に、これから、平尾先生の、お言葉を、よくきくのですよ椎名先生が、そうおつしやつた時、私の胸はぎくりとした、それはあまりに、恥かしかつたものだから、そうして幼兒に對して、すまなかつたから私の胸はこうお思つた。

いや〳〵どうして、私は決していゝ先生ではないのです、おゝ許しておくれよ、可愛いゝ幼兒よしかしこうなつた上からは私も、あらゆる努力を拂つてつくしましよう」と私はひしと、手と手を握つた。幼兒はもう、「平尾先生」「うれしいなう」と手を叩くもの、手を取りあつてよろこぶもの、私は其の日の、早くタイムのすぎ行く事を祈つたそれはあまりに童魂の世界が恐ろしかつたものだから。

× × ×

次ぎの一日でありました、春も末頃で、夏を思はせる樣な日でした、私は第一、自分が幼兒の樣な氣になつて、一所に遊んで、やらなくてはいけないと思つた、又それが第一早道の幼兒の魂を知るによいであろうと思つた。私は多くの幼兒と砂遊びをしてゐました。すると四五人の幼兒が走つて來た、「平尾先生」「先生」と口口に叫び出した、私は幼兒に變つた事でも出來たのではないかと、胸さはぎがした。一人の幼兒が、「大變なんですよまあちやんが蝶の羽根を一つのけたよ」、一人の幼兒が「まあちやんが、蝶を殺したよ、」さもいきどほりの聲をはり上げて訴に來た、私の心の內では「まうなんの事、たつた蝶の羽根をのけた位い、しかし、私は始めて尊き魂を知る事が出來た、あゝそうだ、幼兒の世界はこの樣にまで潔く、いつくしみ、あはれみに富んだ世界、我々の世界には味ふ事が出來ないと思つた、私は皆につれられて其方へ行きました。七八人の幼兒が「どうして蝶の羽根をのけるのだ、もうするんかせんのか」、と口口に言つて頭を叩いてゐた。「まあちやんの目には涙が宿つてゐた、しかし泣手はしなかつた、私は走りよつて「けれどまつて上げて頂戴い」「まあちやんどうしたの、蝶の羽根をわざとのけたの、もとから、ついから、どちら」私は問ふて見た。「先生あのね、松の木にこの蝶がとまつていたの僕が捕りたかつたから、この棒で叩いたら一つの羽根がのいたの」、決して自分が羽根を取るつもりではないが、しかし棒の力すぎて蝶の羽根はのいたのである。だから、まあちやんにとつては偶然だつたかもしたない。「あのネ、まあちやんはネ、わざとでなくてついでやつたのよ、だから許して上げて頂戴い」幼兒は其言葉をきいて、うなずいた。すると一人の幼兒が、あの松に逃がしてやら

うと松の方に走り行き、其の木にとまらした、幼兒はもう蝶の事をわすれたのであろう、みな思ひ思ひにたのしそうに遊んでゐる。私もなんだか、小さき魂の何らかの發見した樣な感がした。私も一生懸命に幼兒の遊戯に見入つて居た。すると、側に居た女の幼兒が「先生蝶がとんで來た、あの蝶、お母さんでしようネ、キツト探しに來てゐるのでしよう、皆がおるので困まつてゐるのでしよう、皆がおらなくなつたらくはゐて歸るのでしよう」ととんでゐる蝶を指びさした。私は其の言葉と、幼兒の顏とを凝視してゐたが、自分はつい幼兒といふ事について深く考へさせられた。ほんとうに、少の邪念もない純眞なそうして自然な生活それはほく〳〵と軟かい春の陽の光を浴びて十二分の空氣と水とを吸つて、今ずい〳〵延びて行く野の若草の樣な、幼兒の美くしい魂よ。

私は汚してはならない、其の美くしい尊い魂を出來る丈自然に延ばして行かなくてはならない、そうだ、これが又私の務めであろうと思つた。

× × ×

三日目の日でした、いくらかの、不安も恐ろしさも親しみと、よろこびに變る樣になりました。集會の時でした、椎名先生が今日は澄宮殿下の御唱歌をうたひましよう、「ミヤクンが、ゴシヨカラ、イツギ、カヘルトキ、マチニ、デントウ、ツキニケルカナ」、皆さんカナつて知つてゐますか、僕知つてゐる、僕も私も、それぞれに言つてゐる。「後藤さん何んですか？」「はいカナダライです」私は其の言葉を聞いた時、笑はずにはゐられなかつたデントウつて知つてゐますか」皆が知つてゐるといふ、「梶原さん何んですか」「はいデンボウです」他の幼兒が「先生違ふよデンワです」「ガイトウです」「デンキです」、口口にそれ〳〵に答をなした。又先生が話を變てラジオつて知つてゐますか」「僕

知つてゐる、先生僕、公園に行つて見たよ、大きな顔して、ウォーとほえたよ、僕びつくりしておそろしかつたよ」とさも得意げにまうなんといふ事だろう、ライオンと間違えてゐる、けれど私は其の言葉をきいて、幼兒の想像力の發達の甚だしいのにおどろいた。しかし其想像力も決して、社會の想像力と一種性質を異にしてゐる事を知つた。

× × ×

かくして幼兒は無限の永遠の世界に延びます、

× × ×

これは私の童魂にふれた最初の印象でありますもつと〳〵驚された事がどの位ゐあるか知れないのであります。いつも何のこだわりもない彼等に接してゐると、知らず識らず自分が清められつゝある事を知ります。幼兒は本當に保育をやつてゐます私達より、偉大なる先生であります。

× × ×

童魂への融合……それは今の私によつては唯一つの貴い仕事であります。

（大正一五年三月七日）

天は自ら助くるものを助く。